特集１

B面の特集趣旨

美　馬　達　哉
（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

有馬が記しているとおり、本特集は、東日本大震災から10年を経た2021年に、震災直後のドキュメンタリー『プロジェクトFUKUSHIMA!』の上映会を行い、その製作に関わった二人のアーティストである大友良英と藤井光の対談を開催するというイベント企画から始まった。この企画案そのものは、アート関連の職から本学院生となった有馬が、以前から培ってきた人脈からでてきたものだ。

生存学研究所風に異種混交な集まりとしての本企画を、どのように有馬と構築していったかのレシピをここに書きとめておく。

私は、藤井とはすでに面識があり、2019年11月9日に本学で開催した国際シンポジウム「共有できない平和／争いが移動する（“Unshareable Peace(s) / Conflicts in Motion”）」で、映像作品の上映と講演をお願いしたことがあった（立命館生存学研究4号、2020に収録）。藤井は、アートと社会に関する鋭い分析や発言でも知られている（『地域アート　美学／制度／日本』（藤田直也編、2018、堀之内出版）『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論 / 実践　芸術の社会的転回をめぐって』（アート＆ソサエティ研究センターSEA研究会編、2016、フィルムアート社）など）。藤井は、いわゆる地域アートが地方での「動員の装置」となっている現状を批判しながらも、コミュニティに関わり社会的課題と向き合うソーシャル・プラクティスのもつ潜在力を評価していることが窺えた。また、彼の作品は、社会的相互行為や社会参加や社会変革に関わる出来事やプロセスに、作家によるアート実践という光を当てて、鋭い批評性を生み出していると感じられた。

そこで、『プロジェクトFUKUSHIMA!』上映イベントに対して、ドキュメンタリーを社会的文脈に開いていくために、まず組み合わせていきたいと考えた観点ないしテーマは、「出来事とアート」という問いだった。たとえば戦争や災害のような、全社会を巻き込む出来事のただ中では、生きることや生存に直接には不必要な奢侈品ではないのか、という議論はしばしば現れる。とくに、そうしたアートを贅沢品と決めつける論調は、COVID-19パンデミックの拡大していた2021年には強く感じられた。そうした流れに抗する意図を持っていた私たちは、2011年の東日本大震災と2021年現在のCOVID-19とを「災害とアート」として並べ読みすることから何かが見えてくるだろうという直感があった。

この観点の取り方は、一見すると「病い、老い、障害とともに生きること。異なりをもつ身体。」という生存学研究所のテーマとはかけ離れているように見えるかもしれない。しかし、それは違う。いま生存学研究所の研究プロジェクトの扱う「生」の多くは、たまたま障害やマイノリティに関わる内容が中心になってしまっている。だが、もともとは「福祉や医療の対象である前に、人々が生きていく過程」として、生存学における「生」は構想されていた。その視点からすれば、『プロジェクトFUKUSHIMA!』という作品には、生存には福祉や医療より以前にアートも必要だと断定する野蛮（？）な勇気を読み取ることもできよう。

ただし、これだけでは、このイベントを、上映会プラス思い出の対談ではなく、より広い問いに開いていく方向性や気分のあり方をぼんやりと示しているだけだ。

イベントを具体化するには、「出来事とアート」や「災害とアート」という大きな問いを、どうやって短時間の企画プログラムに絞り込んでいくかを工夫する必要がある。そこで導きの糸になったのは、先端総合学術研究科の同僚で、本企画に関わってもらったマーティン・ロートも編者であった『世界のなかの〈ポスト3.11〉　ヨーロッパと日本の対話』（坪井秀人、シュテフィ・リヒター、マーティン・ロート編（2019）新曜社）だった。その本は、東日本大震災という出来事を、それに相応しいアプローチで分析することのできる異種混交的で領域横断的な学術を目指すものだった（必ずしも成功しているとは言えないが）。そうした場合、出来事を〈ポスト3.11〉として歴史化しつつ分析するアプローチは、アカデミズムの側から見て一つの有力な手法だ。

こうして、本企画は、撮影10年後に『プロジェクトFUKUSHIMA!』を観客として見る受容の実践に、メディアイベントを通じて構築された「災後」という歴史性を

意識して見ること、そして、個人の思い出とは区別され、メディアを通じて作り上げられる集合的記憶の一部品としてアート作品を見直すこと、の二つのレイヤーを重ね書きして、それらをシンポジウム討論のコアとして具体化していくことにした。といっても、災害やメディアの歴史社会学や集合的記憶に関する研究動向に有馬も私も詳しいわけではなく、コンセプトの練り上げや人選は、ちょうど『戦後日本、記憶の力学　「継承という断絶」と無難さの政治学』（2020、作品社）を上梓して、集合的記憶とメディアの相関に切り込む視点を提示していた本学の福間良明から助言を受けて可能となった。縁の下でのご協力に感謝したい。

見えない協力といえば、パンデミック下のウェブ動画配信イベントは、有馬が紹介してくれたKYOTOGRAPHIEの経験と手腕がなければ不可能だった。ただただ感謝である。

企画の成否は、仕掛けにどれだけ思想を詰め込んだかではなく、パフォーマンスとしての成功にかかっている。それは、特集を読んで判断して欲しい。少なくとも、災害とアートをめぐるいくつかの重要な論点は指摘できたと自負している。

付け加えておくと、本企画のタイトルは、記憶と近代の時間性を扱った寺山修司の遺作『さらば箱船』（1984）へのオマージュである。